

「食育基本法」前文の英語訳（足立・佐藤訳）を食育等の議論に活用してほしい

足立己幸 名古屋学芸大学名誉教授・名古屋学芸大学健康・栄養研究所客員研究員
(食生態学、食教育学、国際栄養学)

今年3月に「第3次食育推進基本計画」¹⁾が、5月には平成27年度版「食育白書」²⁾が公表され、今、全国的に食育をめぐる大きなうねりの時期を迎えています。これらの原点である「食育基本法」³⁾についても、あらためて深い理解や吟味が必要になっています。

一方、日本の食育について、他の国々の行政や関連学会関係者の関心も高く、国際的なワークショップ、専門家研修や大学院の特別講義等で取り上げられる機会が多くなり、筆者らは必要に応じて英語訳を作成し、対応してきました⁴⁾。特に「食育基本法」のコンセプトや法律全体を概観できる「前文」は、人間の「食」をどうとらえるか、望まれるあり方やその実現方法、とりわけ「食育」という新しい概念について議論のたたき台になることが多く、海外の専門家からの質問も多くあり、英語訳を重視した経緯があります。

行政機関等から公的に「食育基本法」の英語訳が公表されていないために、最近筆者らの英語訳を使いたいとの申し入れが多々寄せられるので、今回、研究所のホームページで公表することにしました。多くの人に活用していただければ幸いです。

英語訳に当たって、まず、「食育基本法」で表記する重要な日本語の概念について学術的な吟味をし、訳出する英語の概念との整合性を検討し、かつ、国際的に公的な場で使用可能な英語表現法でなければならないと考えました。前者について主として足立が食生態学⁵⁾⁶⁾を基礎にする食教育や国際栄養学の研究と実践の観点から、栄養教育学等の国際的動向⁷⁾をふまえて、検討しました。後者について佐藤都喜子博士（名古屋外国語大学教授・元名古屋学芸大学健康・栄養研究所客員研究員）の協力を得て、主として医学・健康地理学を基礎とする国際協力・政策の観点から、それぞれ吟味した上で、両人で繰り返しの討論を重ねました。

とはいえ、英語訳は重視する専門性や使用目的により、さまざまな内容が必要であり、可能ですので、本英語訳をたたき台にして、より質的に高まることを期待します。

そして、活用や検討のプロセスで、概念があいまいなままに使用されがちな日本語の専門用語の概念も吟味する機会が増えることを期待します。

1. 「食育基本法」の英語訳

英語訳は 別紙1

日本語は <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/law/law.html#zen>

2. キーワードについて英語訳検討のポイント

(1) 「食育基本法」のタイトルについては、すでに内閣府から公表されている英語訳 **Shokuiku Basic Act** を用いた。

(2) 「食育」は内閣府から公表されている **Shokuiku** を用いた。英語訳は **Food and Nutrition Education /Promotion**。Education だけでなく Promotion を併記した理由は、「食育基本法」でめざす食育が、いわゆる教育的アプローチだけでなく、多様な場、多様なグループや組織、多様な形態ですすめる活動、とりわけ協働・ネットワーク形成・環境づくりを含む多様な活動を特徴とすることにある。

(3) 「食」について **Food and Nutrition** を用いた。

前文中の16箇所で使用されている「 」付きの「食」がカバーしている概念はかなり広く、記述内容からとらえると、食物の生産・加工・流通・販売・保存・調理・食べる・栄養・健康・生きる力の形成・次の活動の再生産・これらに関する情報の受信・発信・伝承、国内外の流通、教育・食文化等とこれらの関係や循環に及んでいる。これはのちに公表された「食育ガイド」⁸⁾の「食育の環」の視野で理解できる。Diet や Food ではカバーしきれないと考えた。

足立は、食生態学のキー概念として「人間・食物・環境との関わり」の概念図を作成し、英語タイトルに“**Food and Nutrition Dynamics**”と名付けて、国際学会等の討論に供してきた⁴⁾。食生態学ではほぼ同じ視野に“**Ecology of Human and Food**”を、時には国際誌名でもある“**Ecology of Food and Nutrition**”を使用するが、研究と実践の対象として、可視的に食の世界を表現するために、**Food and Nutrition Dynamics** を使っている。しかし、法律のキーワードとしては単純明快であることを優先し、**Food and Nutrition** とした。

さて、国際誌等で人間の栄養 **Nutrition** は前述の生産から食べる、栄養・健康、生きる力の形成等の循環性の高い営みを包括している。この点からすれば、前文の「食」は **Nutrition** だけでよいことになる。しかし、日本の現状では（残念なことに栄養学専門家の中にも）**Nutrition** と **Nutrients** の混用がされ、**Nutrition** について栄養素に矮小化した認識が少ないので、**Nutrition** だけでは「食」の理解がゆがむことを危惧した。

一方、**Food** も極めて広い概念で、食物の様々な形態を包括し、ある時は食物にかかわる人間行動を包括して使われることがある。しかし、この場合は食物に中心がおかれ、多様な人間行動や活動、その要因や環境とのかかわりが、背景の一部に扱われることが少なくない。

そこで、前文の「食」の英語訳については、「食」に関する多分野の人びとや生活者が共有できる英語訳であることを優先し、国連等国際的に慣用されている英語表現に準じる方がよいと考えた。最も身近な **World Declaration on Nutrition**⁹⁾ は、WHO と FAO の両者に

より作成され、全世界の施策や活動の基礎になり、すでに第2次世界宣言¹⁰⁾を公表し、活用されているので、参考に良いと考えた。この中では「食」に該当する英語に **Food and Nutrition** が使われている。

しかし、前文で「食」と表記していても文意から見て、食の循環全体でなく、その一部を指している場合は、**Food and Nutrition** でなく、それぞれ該当する英語を用いた。

(4) 食物の諸形態や事象等の用語について一貫性がみられないので、調整した。

前文では、(記述順に) 食生活、栄養、食事、食文化、食料、食料自給率、食育が使われている。

食物のモノとしての存在形態からみると、国や行政レベルで使う食料、(前文には出現しないが) 食品、食材、料理、食事、その中に含まれる栄養素がある。各概念についても諸説があるが、本英語訳では以下のように整理して使用した。

食料； 全体を包括しているので **Food**

食品； 流通分野で食物の商品化したものの総称として使われているが、一方学問分野名で食品学が使われていることから、全体を包括した **Food**

食材； **Foodstuffs**

料理； **Dish**

食事； **Meal** または **Diet** (これは語源の滋養食に由来して健康や治療食としての意味を強調する食事に使われることが多い)

栄養素； **Nutrients**

他の用語については、筆者らが作成した「これからの栄養教育論—研究・理論・実践の環—キーワード一覧 (日英対照表)」を参考にすることを勧める⁷⁾。

<参考文献>

- 1) <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/pdf/3kihonkeikaku.pdf>
- 2) http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wpaper/h27_index.html
- 3) <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/law/law.html>
- 4) Adachi M. Theories of nutrition education and promotion in Japan, enactment of the “Food Education Basic Law”. *Asia Pac J Clin Nutr.* 2008;17(S1):180-184
- 5) 足立己幸編著. 食生活論. 東京：医歯薬出版；1987
- 6) 足立己幸. 生活の質(QOL)と環境の質(QOE)のよりより共生を. *日本栄養士会雑誌.* 2008;51:817-822
- 7) Isobel R. Contento. 足立己幸、衛藤久美、佐藤都喜子監訳. これからの栄養教育論—研究・理論・実践の環—. 東京：第一出版;2015
- 8) http://www8.cao.go.jp/syokuiku/data/guide/index_e.html
- 9) <http://www.fao.org/docrep/u9920t/u9920t0a.htm>
- 10) <http://sd.iisd.org/news/icn2-endorses-landmark-rome-declaration-on-nutrition/>